

# 政治の介入を排除し規制緩和を徹底せよ — 金融ビッグバンを再評価する —



さかきばら・えいすけ

1941年生まれ。64年東京大学経済学部卒業。65年大蔵省入省。69年ミシガン大学経済学博士号取得。94年財政金融研究所所長、95年国際金融局長を経て財務官就任。99年退官後、慶応義塾大学教授就任。「グローバルセキュリティ・リサーチセンター」を設立しディレクターを務める。アジアを中心に世界の市場分析を行う。

榊原英資  
慶応義塾大学教授

97年から始まった「日本版ビッグバン」は、昨年末で一応の目標を達成した。外為法の改正に始まる一連の規制緩和の結果、外国銀行が参入するなど、金融の自由化は急速に進展した。しかし、当初イメージされていた個人投資家の市場への参加はそれほど進んでおらず、何より経済は活性化するどころか、ますます不安が高まっている。当時、財務官として中心にいた榊原英資・慶大教授がビッグバンを再評価する。

工藤 ビッグバンを総括し、建設的な議論をすべき時だと思っています。基本的にビッグバンはやって良かった。しかし、その後の状況を見ますと、日本はかなりの貯蓄をもつ国であるにもかかわらず、期待されたほど個人投資家の参加が増加したわけではありません。間接金融についてのビジョンがなかったことが原因であると僕は考えています。まず、ビッグバンに何が足りなかったのか、そしてこれからどうしなければいけないのかということ、榊原さんからお話しいただきたいと思います。

榊原 ビッグバンでやった「自由化」は予定通りだったと思っています。例えば、銀行業ではソニー銀行やイトーヨーカ堂（アイワイバンク）をはじめとした新規参入がありました。外国勢の参入もあった。問題はその後にある。例えば、ペイオフ解禁を延期したこと。自由化の後、ある種

の混乱を伴うのは仕方のないことです。そこで改革を徹底しなかったから、いまだに旧態依然とした経営を続ける銀行が残っている。それでも、外国系の金融機関がリードする形で、なんとか変革は進んできた。ところが、今度はその反動として、外国勢排除といったナショナリスティックな動きが出てきた。金融業界では特に顕著です。

また、もう1つ問題があります。それは、金融が政治化されてしまっていることです。金融庁を創設し、財政と金融を分離したところまでは良かったんです。ところが分離後、金融庁は極めて政治的になってしまった。先進国を見ても、金融監督・検査は、たいいてい政治から独立しています。本来であれば、中小企業対策と金融監督を同じ機関が行うことに問題がある。中小企業対策をやるのは否定しない。政府の公的金融でやるとか、財政でやるとかすればいい

いわけです。けれども、私企業である金融機関に、中小企業に金を貸せとか、融資を引き揚げるなどか命令するのはおかしい。金融庁の行政のかなりの部分は、政治の圧力で護送船団行政に戻っていると言わざるを得ない。

### 経営者の資質が問われる金融業界

**工藤** 間接金融におけるビジョンの欠如という観点についてはどうお考えですか。つまり、ビッグバンによって描かれていた金融業の未来予想図の問題です。まず、外為法の改正という起爆剤によりおカネの流れの自由化が進んだ。そうなると、今度は魅力ある証券市場をつくらなければならない。そのためには例外なき規制緩和が必要になる。その結果として、競争が始まり、金融業界からも魅力的な商品が生まれるようになり、顧客がそれに対して利便なり魅力を感じて、おカネが集まる。当初はそういう予想図を描いたわけですよね。

まず、外為法改正という最初の関門は突破した。予想通り、流れを一気に変えるきっかけになりました。それから証券分野に入っていった。ところが、そこで馬脚が露れた。期待通りに顧客が集まらなかったわけです。それはやはり、金融業をこうしていくんだというビジョンが足りなかったからではないのでしょうか。

**榊原** そんなことはないと思います。新規参入を認めたとし、銀行法だって改正した。自由化のプロセスの中で、ある種の危機的な状況が生じるのは仕方がないことです。

**工藤** 最初から予想していたということですか。

**榊原** ええ。事実、4大銀行グループの完成という形で、再編は成功しました。外国勢も参入しました。メリルリンチのように撤退した例もあるけれど、シティバンクのように展開中のところもある。ですから、それほど期待に反したことが起こっているとは思っていないです。

**工藤** そういった外資系の銀行では、システム投資を含めたIT革命が始まっていますよね。

**榊原** ええ。例えば、新生銀行のシステムは非常にうまくいっています。おそらく普通の都銀に比べたら数分の1のコストでシステムをつくっています。なぜかという、システムを外注しているからです。

**工藤** それは経営ビジョンがきちっとある経営者であれば……。

**榊原** できますね。経営者の問題なんです。新生銀行は「アイ・フレックス」というインド・バンガロールにある会社にソフトを外注しています。また、システムに強い専門家のインド人を10人ぐらい雇っています。当然、コストは非常に安い。八城政基社長がシティバンク時代に築いたコネクションを使い、うまくいっているわけです。

**工藤** 経営者の問題はやはり大きいわけですね。ただ、その前に、ガバナンスの不在についても考えねばならないと思うんです。公的資金が資本の30%近くを占めている日本の銀行は、自己規律がないというか、ある意味で管理依存しているところがあ

る。市場のプレッシャーによって何かするという形になっていないので、そもそも経営者の力を発揮する土壌がない。

**榊原** 私はそれも経営者の責任だと思います。そういった現実慣れるしか道はない。環境が変わったんだから、ビヘイビア（態度）を変えるのは当然の話です。繰り返すようですが、問題なのは政治と行政です。新生銀行のような改革を進めている銀行に対して、金融庁が「中小企業におカネを貸せ」という。それはおかしいですよ。金融と中小企業行政を一緒にするなど。自由化・規制緩和したんだから、公的な役割を銀行に担わせてはいけません。補助金を出してやらせるというなら話は別ですよ。そうではなく、「貴社は社会的責任として中小企業に資金を貸さねばならん」なんて言われたら、商売なんかできないです。

### 金融に対する政治の介入を排除せよ

**工藤** では、そういう現状をどう変えていけばいいのでしょうか。

**榊原** 単純ですよ。そういう規制を排除すればいい、それだけの話です。行政指導をやめろと。要するに、金融に政治が入り過ぎているんです。今までは、間接的に大蔵省が裁量行政をやっていたわけです。もちろん政治の意向も入れながらやっていた。しかし、いまや金融庁は大蔵省から離れたわけです。それなのに、今度は政治の意向が大臣を通じて伝えられる。それでは意味がない。

**工藤** でも、銀行は収益を上げていない

から、独立して裁量を発揮しにくいという現実もある。

**榊原** 中小企業保護をさせられているから収益が上げられないんです。銀行の業務として、信用のないところに対しては、当然金利を上げなければいけない。

**工藤** 適正な利ざやが必要ですよ。

**榊原** そう。それが自由化なんです。かつてはいろいろ規制していたわけでしょう。それが、いまや銀行が自由に金利を設定できるわけです。

**工藤** しかし、まだまだ間接金融の度合いが強い。

**榊原** いや、間接金融が直接金融にならなければいけないとは必ずしも言えないですよ。それはマーケットが決めることです。強引に直接金融に持っていくといっても、インフラが整っていなければできない。それに、おそらくアングロサクソン型とアジア型システムは違う。むしろ金融業務と証券業務を兼ねるユニバーサルバンキング（日本の場合には持ち株会社）のように、銀行がマーケットにかかわっていく形になるかもしれない。必ずしもアメリカモデル、アングロサクソンモデルが正しいとは思いません。

### 銀行の失敗

**工藤** 銀行がここまで深刻で、再び公的管理に陥る状況は想定していらっしゃいましたか。

**榊原** 当初は考えていなかったですね。自由化に主眼を置いていましたから。

**工藤** でも、自由化が招いた競争により惨憺たる状況に陥った。

**榊原** けれども、都市銀行は自由化を望んでいたんです。もちろん外為法改正なんかは反対しましたがけれども。

**工藤** しかし、収益を上げる前に、もともとあった不良債権の重圧が……。

**榊原** それは、過去のしがらみを銀行経営者が絶てないところに相当な問題があるわけです。不良債権の問題も同じ。銀行の株式保有を例にとると、これは早いうちに株を売るべきなんです。体力のあるときに売らなければいけないんだけど、売るのが遅い。なぜ売っていないかという、過去のしがらみなんです。株をもつことによってほかの商売をやっているところがあるわけです。そんなことをやっているから、株式市場で経営を左右されてしまう。

**工藤** ようやく今、持ち合い株を少しずつ売りに出している。そうすると、マーケットが崩れ、株の含み損も出てくる。

**榊原** そのくらい、マーケットが崩れないように売れますよ。

**工藤** でも、銀行の人たちは無理だという。古い依存関係はまだまだ根強く残っているんです。

**榊原** それを断ち切らなければいけない。日産だってゴーンさんが入ってきて系列破壊をやったわけでしょう。銀行もそれをやらなければいけないわけです。

**工藤** ならばこそ、銀行の株持ち合い解消などを含めて、間接金融側のシナリオを描いておくべきだったのではないかと思うんです。

**榊原** 僕は内部にいたけれども、フェアに言って、シナリオが描けなかったとは思わない。そこそこの自由化はできたとし、新規参入も進んだ。銀行の側で失敗したとまでは言えないのではないのかな。確かに、従来のように銀行が守られなくなったのは、やはり金融ビッグバンが原因でしょうけどね。ただ、銀行を倒す方がいいことだと思っているわけではないですよ。ソフトランディングが一番いいんだけど、たとえハードランディングになっても、再編はしなければならないというのが行政の目的ですから。銀行の場合、97~98年にかけて、結果としてハードランディングになってしまったということです。

**工藤** そのリカバリーのために銀行は合併を繰り返し、4大銀行に落ち着いた。

**榊原** そう。でも、あれは新しい時代の合併ではない。新しい時代の合併は、片一方が破綻、片一方がのむことなんです。

**工藤** 片寄せすることですよ。

**榊原** 小さい方が大きい方をのんでもいい。例えば、シティバンクの場合はトラベラーズにのみ込まれたわけでしょう。自由化された社会とは、本質的に競争社会ということなのに、そこでみんな対等にやろうなんて思うからうまくいかない。

**工藤** 日本は国難があると必ず、鉄鋼会社もそうですけれども、国内企業でなんとなくまとまって資本を増やす傾向がありますね。

**榊原** 本来は外資との合併がなければいけないんです。ヨーロッパだってそれがあつたし、アメリカだって随分ヨーロッパ

企業と結びついている。日本だけが、みんな日本連合。日産がうまくいったのは、やむを得ずだけれども、ルノーと組んだからでしょう。新しい血が入ってきて、新しい発想が入ってくるからうまくいくわけです。日本特有のナショナリズムというか、閉鎖的な部分が問題なんです。金融は今グローバルな商売ですから、日本連合だけでは絶対うまくいかない。

### 銀行はシステムの構築を急げ

**工藤** 金融ビッグバンの後にIT革命が起きました。その中で、例えば松井証券に見られるようなネット取引が出てきた。銀行はそういった時代の趨勢にあまり対応していませんね。

**榊原** けれども、ネット取引が最後までうまくいかどうか分からないよ。ソニーもネットバンキングをやっているけど、店舗を作らないというやり方に疑問を感じます。物理的なアウトレットが全くなくてバンキングができるかどうか。シティバンクの場合は店舗があって、インターネットでも取引ができる。多様なメニューの1つとしてインターネットがあるというのは、これから非常に重要なことだと思います。しかし、インターネットだけでやるのは、確かにコストは低くなるけれども、本当にサステイナブル（持続可能）かどうか。IT革命というのは若干バブルな部分がある。だから、ITを利用した金融も、当然バブルな部分がありますよね。

**工藤** 僕はすでに一部利用しています。

ネットバンキングも含めて、今後銀行はどんなになっていくのでしょうか。先進国に行くと、銀行のカードなんてどこでも使えるし、ショッピングでも使えたり、金融サービスを得ている実感が十分わかります。日本はある意味で遅れていますよね。

**榊原** みずほ問題ではっきり出たんだけど、日本の銀行はシステムがうまくできていない。これは銀行だけではなく、システムを外注しない日本の体質に問題がある。まず外注することでシステムが安くなるんです。それに加えて、システムを変えるときには、組織を新しいシステムに対応して変えなければいけないんです。ところが、日本ではシステムの方を組織に対応させようとする。海外の技術者に聞くと、日本のソフトが一番大変だという。なぜかという、日本は汎用ソフトを使わないから。自分の組織に合わせてソフトをつくってしまう。そもそもシステムとは何かということ、日本人は分かっていない気がします。例えば、コストダウンが必要なら、汎用性のあるシステムを構築し、市販されているソフトをうまく使わなければいけない。自分の組織に合わせてシステムを変えてしまうと、ソフトウェアをつくるコストは2、3倍に膨れ上がってしまう。しかも、特定のハードウェア会社と結びついてそれをやっている。だから、本来の意味でのシステム志向になっていないわけです。

### 証券会社の失敗

**工藤** 中小企業保護行政の介入を断ち切

り、銀行だけが適正利ざやを取るという形ではうまくいかないのでしょうか。日本の戦後は間接金融依存、すなわち顧客をベースにしてありましたから、顧客が直接市場で資金調達できる仕組みや、ベンチャーに資金が流れる仕組みなどの整備を進めるほうが先なのでしょう。

**榊原** それはまず銀行がやらなければ。ダメなもの断ち切らなければいけない。

**工藤** そうすることが、日本経済の体力を強化するという認識を一致させなければいけませんね。

**榊原** ところが政治の側では一致していない。弱い者は助けろと。政府が弱者救済に動かなければならないのは認めますが、私企業にそれを期待してはダメだと言っているんです。銀行は私企業なんだから。

**工藤** 一方、直接市場に目を向けると、公正なルールの下で個人が参加するという当初のイメージは、今年の最終年度段階では実現できていないですよ。

**榊原** 投資ファンドが大きく伸びるチャンスはあったんですがね。ところが、証券会社がそれをぶっ壊してしまった。例えば、野村証券は1兆円ファンドで多くの投資家に損をさせた。にもかかわらず、証券会社だけが手数料で儲けているわけです。証券会社が経営の形を変えなければ、投資家は市場に参加しようとしませんでしょう。野村ホールディングス社長の氏家純一さんが一度やったんです。要するに、アウトスタンディングアmountに合わせて手数料を取る方式ですね。1回ごとの取引ではなくて、残高に合わせて手数料を取ると。でも、結

局うまくいかなかった。

**工藤** 新しい証券会社が出てなければいけないわけですね。

**榊原** そうです。従来型の株屋ばかり。よく言うんだけど、投資家に儲けさせるのは、別に買っただけで儲けさせなくてもいいわけでしょう、売りで儲けさせたい。ところが、政府も証券会社も遅れている。売りは悪いことだという発想なんです。先日も「空売り規制」で処分を受けるところが出た。どんどん株価が上がっていく時代じゃないんだから、売りも視野に入れないとやっていけない。そもそも、投資家が何を考えているか、どうやって投資家に得させるかという発想が金融機関にはまだないですね。

**工藤** チェックという意味も含めて、金融監督の側にも投資家保護という観点が欠如している気がします。どうしてなんですか。ビッグバンで証券業界は変わると思われたんですか。

**榊原** 少なくとも財政と金融を分離したわけだから、ビッグバンはよかった。検査と監督を主な業務とする金融庁が独立したことで、目的は十分果たしたと言えるのではないかと。

**工藤** しかし、投資家保護のイメージがあったのならば、検査に人手が必要となるのは自明のことだったのでは……。

**榊原** 検査員の数が足りないという指摘はあっていますが、検査の質はよくなったと思います。問題は監督の方ですね。検査の結果が反映されない監督行政をやっている。

## 日本型のマネーフローを模索する

**工藤** 海外も厳しい状況です。日本がビッグバンのイメージ通り動いていれば、日本におカネが集まってくることも想定できたと思うんですけど、こっちもへたって全然集まらない。誤算はないですか。

**榊原** カネが集まらないのは金融だけの問題ではありません。日本経済がだめだからですね。不良債権処理をきちんとやって日本経済が良くなれば、日本の株式市場に金が集まります。今、カネが集まってこないのは、銀行が悪いからとか、マーケットができていないからとか、そういう話じゃないです。経済そのものが弱いからです。日本が構造改革を完遂したら、カネは集まりますよ。昨年末から年始にかけて、小泉首相が本気で不良債権処理をやっていたら、今ごろ株価は上がっています。

**工藤** ベンチャーキャピタリストの皆さんと話をしていると、日本にはマーケットがないとおっしゃいます。つまり、投資家がないというわけです。

**榊原** ベンチャーキャピタルバブルがあった後、ベンチャーキャピタルそのものが下降期にあるんです。1年ほど前、欧米のベンチャーキャピタリストにじっくり話を聞いたのですが、欧米でもベンチャーキャピタルの3分の2は倒産しています。ベンチャーキャピタルそのものが、ITバブルと一緒に出てきたバブルなんですね。

**工藤** それはあります。

**榊原** 日本でベンチャーキャピタルが育

つかといたら、なかなか育たない。あれは極めてアメリカ的な仕組みです。アメリカにはそういう投機家がいるわけです。それに比べて、ヨーロッパではベンチャーキャピタルが育たない。日本でベンチャーみたいなことをやっていたのは、たいてい地方中小金融機関でしょう。その地方の情報を持っている金融機関が、懐の中で地元企業を育てていったわけでしょう。アメリカ型とは明らかに違う育て方をしている。でも、欧米型のベンチャーキャピタルが育たないから、日本はそういうものが育たないんだというのは違う。形は違えど、リスクマネーを出すところがないわけではない。例えば商工中金もやっていたし、中小企業金融公庫なんかもやっていた。日本型のマネーフローのあり方を考えないといけない。今の文脈でいえば、地方金融の再編を促すことによって、そういうものをもう1回蘇生するのも1つのやり方なんです。

## 金融業への新規参入は 終わったわけではない

**工藤** 話をビッグバンに戻したいのですが、やはり当初は間接金融から直接金融へというイメージを描いていたんでしょう。

**榊原** いや、僕は少なくとも描いていないですよ。

**工藤** そうですか。

**榊原** 少なくとも、銀行がなくなるとは思っていないし、地方金融機関がなくなるとも思っていない。オーバーバンキングだという感覚はありましたが。アメリカ型シ

システムをつくろうと思ってビッグバンをやったわけではないわけですよ。相当の意味で市場を生かしていかなければいけないというのには賛成です。自由化する中で、日本がアメリカ的になる部分もあるだろうし、そうでない部分もあるだろう、それは一種の試行錯誤のプロセスの中で新しいシステムができていくんだというのが僕の考え方です。

**工藤** ビッグバンというのは榊原さんにとって何であって、その試行錯誤の結果、今どういうことを考えているんですか。

**榊原** 護送船団行政というか、規制を徹底的に緩和することです。また、それによって裁量行政を捨てることです。

**工藤** 5年計画というイメージは、緊張感を保つためですか。

**榊原** 規制の緩和は5年で終わるということです。その後、また5年、10年とたって、新しい日本の金融システムができていくという話ではないですか。

**工藤** 繰り返しになりますが、間接金融のイメージに誤算があったということはないですか。

**榊原** もうちょっと日本の銀行がきちっとやると思っていましたね。証券業界も、経営が大きく変わっていくと思ったけれども、まだ変わっていない。

**工藤** 日本の金融業はどうなっていくと見ているんですか。

**榊原** 少なくとも製造業と同じくらいグローバルにならなければいけない。外国へ行っていつも思うのは、一番最初に外国に入ってローカライズしているのは製造業で

すよ。商社がその次ぐらいで、銀行が一番ダメ。例えば、銀行の海外支店長は3、4年で変わってしまう。製造業ではそんなことは考えられない。みんな10~20年は動かない。商社だって、少なくとも5~10年はいます。極めてドメスティックなんですね。**工藤** 確かに、顧客から見れば国籍はどうでもいいわけです。サービスが充実していればいい。

**榊原** そう。外国企業のサービスだけがいいというわけではないけれども、シティバンクなんかは相当のサービスを提供している。日本の銀行もそれにキャッチアップをしようとしている。

**工藤** グローバル化だけでなく、他産業からの参入という手もありますね。

**榊原** ソニーとイトーヨーカ堂が参入したけれども、商社が金融をもっとやったらいいと僕は思うんです。各社とも相当の金融部門を持っているわけですから。

**工藤** 確かに、ビッグバンが始まってかなり変わりましたね。

**榊原** 実際、いろいろな商社がどこかで銀行をやろうと思っています。あとは、銀行として預金業務をやるかどうかの問題であって、インベストバンキングはもうやっています。

**工藤** 郵貯の問題は、当時ビッグバンをやるときはどういうご認識でしたか。

**榊原** あれは定見がなかったね。僕は郵貯を民営化して、郵貯を外資と組ませたら面白いと思います。第二のシティバンクですよ。

**工藤** そのくらいのプレッシャーがない



と、日本の金融業界はなかなか変わらないかなという気がします。

**榊原** 正直言って、水面下で変わってはきていると思います。おそらくそのうち、トヨタは銀行をつくる可能性があるわけです。すでに証券会社を持っていますし、なんといっても不良債権を持っていない。ビッグバンによって、例えば、トヨタがきちんと条件を整えて金融庁に申請すれば、免許は取れますよ。トヨタ銀行ができて何の不思議もないです。製造業で先進的な企業が金融業に参入するという事態は現実起こっている。

### 金融業の青写真

**工藤** 現状を受けて、金融庁が金融業のビジョンの検討会を始めています。

**榊原** 政府が個別の産業のビジョンを描く時代ではないと思う。自動車業界はどうあるべきだとか、金融業界はどうあるべきだというのはマーケットが決めるものです。もちろん、政治は政治、行政は行政で、ある種のビジョンはなければいけない。それは産業政策とは違うものです。私見をいうならば、もう金融業はどうしようもないんだから、マネジメントは2つ。1つは、非金融業から新規参入を受け入れ、完全に地図を塗りかえるということ。もう1つは、外国との提携です。後者の方が日本の金融業の将来にとって面白いと思います。

**工藤** 公正なルールの下で、投資家や消費者がリスクをとるという意識改革が必要だと思うんです。そういう意味で、日本は

まだまだ業界ベースでの議論に留まっているのではないかと。

**榊原** そうですかね。僕は証券会社に講演を頼まれてたまに行くんですけども、証券会社は個人を集めて、「リスクをとれ、リスクをとれ」という。僕は違うと思う。プロフェッショナルを信用してくださいという言い方がいいと思うんです。でも、本当の意味でのアセットマネジャーが日本では育っていないし、育てようとしていないからそれは難しい。日本にはプライベートバンキングがあまりないでしょう。つまり金持ち相手のバンキングなんだけれども、そういうカネを持っている人の運用を任せられて運用するという商売がない。欧米では、プライベートバンキングからプロのマネジャーが育っていくわけですよ。大金を持っていない人はファンドにカネを入れ、それをプロのマネジャーに任せる。そういうカルチャーが育たなければいけない。ところが、日本は相変わらず株屋のカルチャーなんです。個人を集めては、株買え、株買えと言っているだけ。日本では、ある種のファンドのようなものが、銀行や証券会社とはインディペンデントに育っていくんじゃないか。プロジェクトファイナンスの分野なら、非金融機関が育っていくとか。そういう方向に展開するのではないかな。そういう生き方に目覚めた金融機関のどこかが残っていく。メジャーな金融機関は10年、20年先は生き残っていないかもしれない。それは、外国にやられるということだけでなく、国内の非金融機関にやられることを含めて。

## 政治の介入を断ち、ペイオフを徹底せよ

**工藤** 今のお話だと、金融業界の混乱はまだまだ続きそうですね。

**榊原** あと10年はかかるのではないのでしょうか。日本経済の構造改革と表裏の関係なんです。構造改革によって、企業の方も変わっていかねばならない。それに、地方金融機関の問題も解決していない。地方金融機関の問題は、要するに中小企業の問題です。政治が絡んでしまっているのです。日本の中小企業行政はかなり遅れている。だからこそ、地方金融機関を再編しなければいけない。あとはそのフォローとして、新しい活力をどう入れてくるかが鍵です。地方で新しく銀行を始めるやつが出たっていいわけでしょう。新しい信用組合とか新しい信用金庫とか。

**工藤** そういう人が出てきてほしいんですが、今のところ見えないですね。

**榊原** なぜかという、地方の金融は、まだ自由化されていないからですよ。

**工藤** ペイオフを徹底せよということですね。

**榊原** その通り。ペイオフはビッグバンの最終章だと僕は言っている。そうすると倒れるというけれども、当たり前だ。倒すためにやっているんだ。ビッグバンというのはもともとそういうものです。再編成なんです。倒すというとガラガラするけれども。

**工藤** 中小企業行政に対する政治の介入を断ち切るために、こうした方がいいとい

う方策はありますか。

**榊原** 金融庁を公正取引委員会のような独立機関にするべきです。もちろん長官には非政治家を任命する。ヨーロッパ諸国では銀行監督権は中央銀行にあるんです。ドイツはブンデスバンク、フランスならバンク・ド・フランス。これは完全に独立している。仮に中央銀行による監督が難しいなら、中央銀行と同じような独立性を持った審議委員会を創設し、透明性を確保して、金融庁は完全に政治から独立させてしまう。

## ビッグバンが必要なのは金融業界ばかりではない

**工藤** イギリスでもビッグバンがありました。結果として市場がかなり活性化しましたよね。日本はまだたった6年目とはいえ、この差は何なのでしょう。

**榊原** あと5年くらいで活性化してほしいと思っています。ただ、金融は常に裏側に借りている人がいるわけです。だから、日本経済全体が活性化しなければ金融は活性化しないし、逆に言うと、金融が活性化すれば、日本経済全体が活性化する。そういう意味で、サッチャー元首相は金融だけ変えたのではない。全体を変えたわけです。当事者の僕が言うと傲慢に聞こえるかもしれませんが、他のところがビッグバンをしなくちゃいけない。金融だけではもたないですよ。不良債権問題も然りです。流通業界のビッグバンをやってください、建設業界のビッグバンをやってくださいと言いた

い。

**工藤** 確かにその通りです。金融だけ歪みが来ますよね。

**榊原** そうです。何かというと、悪いのは銀行だと言われる。でも、貸しておいて貸した金を取れない人間と借りておきながら借りた金を返さない人間では、借りて返さない方が悪いに決まっている。

**工藤** もちろんです。

**榊原** 銀行はみんなに嫌われる存在だから、要するに金貸しだから嫌われるけれども、銀行だけたいたいもしょうがないんです。それよりも、規制されている産業を変えなければいけない。例えば、建設とか流通とかは大変な規制産業。最近、医療の勉強をしていたんだけど、医療業界なんかも、ものすごい赤字です。病院への貸し出しはみんな不良債権なんですね。そりゃそうでしょう、全国の病院の70%が赤字ですから。

**工藤** 国立病院も赤字ですね。

**榊原** そういうところはみんな規制産業なんです。だから規制緩和をやらなければいけない。

**工藤** 橋本内閣の掲げた6大改革のうち、実際に行われたのは金融改革くらいのものですよね。他はほとんど手も付けられなかった。つまり、これは今の政治システムでは難しいということなんですか。つまり、日本のシステムではどんどん政治家が変わってしまうから、こういった長期的な全面改革は難しいと。

**榊原** いや、政治システムの問題ではありません。政治家が変わっても改革は可能

です。なぜ金融だけがビッグバンを遂行できたかという、金融業界は、比較的政治的利権が少ない領域だからです。政治家は銀行からそうそうカネをとるわけにはいかない。けれども、建設業界、流通業界は違う。完全に利権の温床になっている。要するに、政治的しがらみで自由化ができないんです。流通業はまさに自民党の牙城だし、建設業はカネと選挙と両方の意味での牙城です。医療業界にも自民党の大票田である医師会がある。本来ならば、流通業をどうするんだとなったとき、経済産業省がビジョンを描かなくてはいけない。それなのに、経済産業省のトップである平沼赳夫さんが、ダイエーをつぶすなど言ったりする。そんなんじゃビッグバンなんかできっこない。最初、UFJの室町社長はダイエーを処理しろと言っていた。公的資金の投入を覚悟してダイエーを倒すつもりだったんです。ところが、内外からいろいろなプレッシャーがかかってきて、最後には詰め腹を切らされる。あまりにもプロセスが政治的過ぎるわけです。

### 最後に問われるのはリーダーシップ

**工藤** 最後になりましたが、金融業界は相当自由化が進み、その歪がいろいろなところで出てきている。再編のプロセスとはいえ、このまま流れに任せるといいんですか。

**榊原** 改革の推進力は、マーケットと選挙だと思うんです。マーケットがプレッシャーをかける。一方で、選挙で既得権益

に対するプレッシャーをかける。その2つだと思います。今のままだったら、自民党は次の選挙で負けますね。そして、民主党あるいは新しい党が次にくるのですが、いずれにしても現行の不良債権処理を続けているようではマーケットはもちません。3月は空売り規制で何とかしのいだけれども、そうそうあんな奇策はとれない。本当にあれはまさにマーケットを奇襲したわけですよ。

**工藤** 真珠湾と同じですね。

**榊原** そう。あれは真珠湾。金融庁は真珠湾をやるから、6カ月の間に何とかしてくれと訴えたわけです。日本は、例えばパテントの申請数でもアメリカに次ぐわけですから、まだ技術を持っている。また、だんだん悪くなっているとはいえ、人的資源もまだある。日本で悪いのはリーダーシップなんです。そこを変えればいい。サッカーのチームだって、監督を変えてよくなった。日産だって、カルロス・ゴーンが社長になってよくなった。

**工藤** でも、アメリカの人を首相にするわけにもいかないですからね（笑）。

**榊原** 別に外国人でなくてもいいんだけど、今までの発想から切れた人になって、それでリーダーシップをとれば結構できるんです。

（聞き手は工藤泰志・言論NPO代表）